

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者 氏名 **Aingeru Aroz Rafael**  
(アロツ・ラファエル アイングル)

論文題目 **Language as Process:  
Tokieda Motoki's Theory of Language at the  
Intersection of Linguistics and Philosophy**  
(言語過程 - 言語学と哲学の交点における時枝誠記の言語理論 -)

Aingeru Aroz Rafael (アロツ・ラファエル アイングル) 氏の博士学位請求論文「Language as Process: Tokieda Motoki's Theory of Language at the Intersection of Linguistics and Philosophy (言語過程 - 言語学と哲学の交点における時枝誠記の言語理論 -)」(英文 372 頁) は、近代日本を代表する国語学者・言語学者 時枝誠記 (1900-1967) の「言語過程」説を核とする言語理論の成立と展開を、「言語学と哲学の交点」において捉える、言語学思想史の研究である。

非インド・ヨーロッパ語族言語である日本語とその文法の問題を、二十世紀前半の世界および日本における、1) 言語と思考をめぐる学的認識全体の転回、2) 現代言語学・人文諸科学の成立、3) 新しい哲学潮流の登場、4) 近代日本独自の言語学・哲学の追求、5) 言語問題にあらわれた文化と思想をめぐる批評的論争状況、という相互に絡み合い重層決定された問題群のただ中に位置づけ、非西欧言語文化圏における言語学と哲学の知の成立の可能性、その認識論的条件と科学的射程、文化理論的な拡張りと文明論的意義について、二一世紀の現代理論の水準からのトータルな学的評価を実行しようとする試みである。

方法としては、1) 時枝誠記の全業績のモノグラフィー研究をこえて、2) 近代日本の国語学を生み出した日本の言語思想史の通史的な捉え返し、3) 現代の言語学・文法理論に基づいた国語学・日本語学の諸学説の実証的検証、4) 現代の言語哲学および論理学の知見に基づいた論点整理、5) 二十世紀現代思想潮流（とくに、構造主義および現象学）のパラダイム比較研究、の方法によっており、言語学、哲学、言語哲学、哲学史、言語理論史にまたがる学際的な研究となっている。

アリストテレス以来の論理と文法の伝統のなかで形成されてきた西欧の哲学および言語学と、それとはまったく異質な非インド・ヨーロッパ語族言語としての日本語と漢字かな文字文化を基礎として発達してきたことばと思考の知が会うのが、近代および現代日本における哲学および言語学をめぐる認識論的な問題である。この問題はすでに一九世紀末から二十世紀初頭の近代日本における哲学と人文諸学の誕生を動機づけるとともにその形成過程のなかで問われ、ヨーロッパにおけるフッサールやハイデガーの現象学・存在哲学の勃興による認識の革新の動きと呼応した日本における西田幾多郎を初めとする哲学にお

ける京都学派の形成、実験心理学や構造主義言語学の登場に直面した日本における言語科学・文化諸科学の展開のなかで、近代の知の条件をめぐる重層決定された問いとして問われてきた。時枝文法が提起している言語と哲学の問いとは、まさにこの近代の知の問題系の中心に位置する問題である。二十世紀後半においても、言語と文化をめぐる相対主義的な議論の世界的な拡がり、構造主義やポスト構造主義と呼ばれた人文科学・現代思想の展開、言語論的転回と呼ばれた論理学や哲学のパラダイム転換、ポスト・モダニズムと呼ばれた近代の知の条件の問い直しのなかで、多様な学問領域および文化領域の言説が交差する論争的結節点を、この問題は占めてきており、時枝言語理論については、国語学、批評理論、思想史、言語理論史の観点からの研究も蓄積されてきた。さらにまた、現代言語学においては、チョムスキー派の生成文法による世界の言語のシンタクス研究の展開、日本語を対象とした言語学・国語学研究の進展によって、日本語の何を理解し理論化しうるかについての言語科学的な知見も現在では飛躍的に高度化している。

アロツ氏の研究は、こうした文化的理論的全体状況、研究史の蓄積、現代的な科学研究の展開をふまえ、時枝の言語理論の現代性を言語学と哲学の過去と未来の展望のなかに位置づけようとしたものである。

論文は全六章から構成されている。

第一章「Introduction: Puzzles on language in Modern Japan」では、日本近代の四大文法のひとつとされる時枝文法の国語学における位置、時枝をめぐる現代の批評状況と論争史、「詞・辞」の構文構造論を軸とした「時枝的転回」と現代のモダリティ研究や構文研究との関係、「日本語の論理」をめぐる日本哲学の動向、国民国家や帝国の言語イデオロギーと時枝国語学との関係についての先行研究が跡づけられる。時枝の言語理論の歴史的位置および問題提起が画定されたうえで言語学と哲学の交点に位置づけられ、各章でのアプローチの視点と論点が予告されている。

第二章「Before the process theory of language」では、時枝「言語過程」説の歴史的背景が吟味される。時枝の伝記的事実の概要から説き起こされ、日本近代における上田万年、橋本進吉らによる国語学の成立史、19世紀末西欧における言語学の展開や新カント派哲学との関係、時枝の最初の任地である京城帝国大学での国語学研究と植民地政策の状況が跡づけられる。「徳川時代に帰れ」を標語に掲げた時枝「詞・辞」論の理論的ルーツとして、「てにをは」研究の歴史が、古代日本における書記言語の始まりから江戸期の国学者本居宣長、鈴木胤らの文法論まで俯瞰される。さらに近世国学に遡る「係り結び」のシンタクス研究と並んで、先行する国語学者山田孝雄の日本文法理論による「陳述 predication」論争の概要と意義が提示される。

第三章「A Japanese Project of General Linguistics」は、一九世紀末から二〇世紀初頭に西欧で興った「一般言語学 General Linguistics」の登場に接して、日本語に依拠する「一般言語学に対抗する一般言語学」としての、時枝「国語学原論」の特徴を、時枝によるソシュール批判の検討をとおして明らかにする。時枝は、ソシュールの「言語構成観」を批

判して「言語過程観」を対置したが、小林英夫訳ソシュール『言語学原論』の日本語翻訳の詳細な検討をへて、「原子論 atomism」、「実体論 substantialism」、「道具説 instrumentalism」、「外在主義 externalism」の批判をとおして、「心的過程」の言語本質観が定式化されたことが分析される。ソシュール「言語記号」「ラング」観に対置されたのは、「言語作用 language act」観であり、カール・ビューラー「オルガノン・モデル」との対比において、「主体、場面、素材」からなる「言語の存在条件」説の言語学的意義が検討される。

第四章「Tokieda Grammar」は、「時枝文法」のシステマティックな検討に充てられている。「詞・辞」論の品詞論的意義が、「過程的構造形式」、および「意味的聯関」概念の検討をとおして明らかにされる。有名な「零記号」理論を含む、時枝のシンタクス理論が、「入れ子型構造形式」、「文の成立条件」の詳細な検討をとおして、その概念的射程と歴史的意義が測られる。章の後半では、とくに discussion と題して、時枝文法とチョムスキーの生成文法との類似性に関して、日本語を題材に具体的なシンタクス分析の比較検討を行い時枝文法の先駆性と限界を述べるとともに、さらに、日本語文法の歴史的論争といえる、日本語における「主語と述語」問題に関して、「詞・辞」関係が、「主・述」関係モデルに代わりうる文構造モデルなのか、インド・ヨーロッパ語族の言語と日本語の文構造上の相違について詳細な言語学的考察を加えている。時枝文法理論の詳細な検討から浮かび上がるのは、「言語の存在条件」説として表れた「言語における主体性 subjectivity in language」の独創的パラダイムであり、それを基礎づけた、時枝によるフッサール「現象学」の受容に関する次章以降での研究への導入がはかられる。

第五章「Productive Distortion」では、時枝によるフッサール受容に関する先行研究の批判的検討を行い、あるいは、伝記的事実にもどって 1930 年後半の時枝によるフッサール研究の時期を同定したうえで、なぜ時枝文法の形成に現象学パラダイムが求められたのか、「一人称の視点」に立つ「言語における主観性」理論の形成にのってのフッサール現象学援用の必然性が当時の文献の執筆過程をとおして検証される。時枝によるフッサール受容は、山内得立『現象学叙説』(1929)に負うところが多く、この文献に述べられた、フッサール『論理学研究』及び『イデーネー I』の諸要点が、時枝理論の「言語過程」説の形成に重要な役割を果たしたことが指摘される。

第六章「Husserlian Hints」は、前章での文献学的な受容関係の同定をふまえて、フッサールの現象学が時枝言語理論の構築に特に貢献したといえる「意味論」、「詞・辞」論、そして「言語の存在条件」の理論に関して、時枝による現象学諸概念の援用および再解釈について、詳細な批判的検討を加えて両者の影響関係を評価している。そこから明らかになるのは、従来重視されていた「ノエマ・ノエシス」概念に関する影響関係よりは、山内得立の著作をとおして、フッサール『論理学研究』に読まれた、「志向作用」、「作用 質料」、「作用 性質」等の諸概念であり、フッサールによる意味論、志向作用の構造の理論が、時枝の「言語過程」、「言語の存在条件」の理論パラダイムの形成に重要な役割を果たしたこ

とが検証される。全体として、時枝によるフッサール受容には、文化的創発にしばしば見うけられる、誤読的創発（著者のいう「productive distortion」）の性格がつよく、それこそが、日本の言語研究史において生産的な役割を果たしたと結論される。

最後に、「7 Conclusions」においては、本文での各章の議論を振り返り、近代日本思想史、言語理論史における、独創的で複雑な理論形成の体系的な研究として総括したうえで、残された重要な研究課題として、二〇世紀後半以後の時枝をめぐる哲学的な論争状況をあげている。この論争においては、時枝文法と西田幾多郎の「場所の論理」との類似性が注目され、インド・ヨーロッパ語族とは異質な言語伝統のなかに、「文法」と「論理」とを定位しようとした巨大な思想事例として、時枝・西田をめぐる「言語相対主義」の議論を本研究の延長上で言語学的・哲学的研究の射程に入れることが考えられると結んでいる。

以上のように、アロツ氏の研究は、時枝誠記の国語学という日本近代が生んだ最も独創的な言語理論の企てを、モノグラフィー研究を超えて、日本における国語研究の歴史的拡がりを通覧し、二〇世紀の言語科学、人文諸学、哲学の認識論的転回のなかに位置づけ、また二一世紀の言語科学の現在的知見を縦横に駆使して総合的な視座に収めることをめざした、言語学、哲学、言語哲学、哲学史、言語理論史にまたがる、十全な意味における学際的な研究である。

論文審査委員会においては、国語学研究の観点から、現代の国語学研究における詞辞論、述語と陳述の研究の進展から見て時枝理論の相対化といかに向き合うのかという評価の問題、国語学における「述語中心主義」と、論理学における述語問題の関係性についての質疑、「助動詞の相互承接」のような日本語の文法問題へのフッサール「志向作用」理論の適用可能性に関わる質疑など、国語学の文法理解に関する議論が行われた。

さらに、言語理論史の観点から、時枝文法と生成文法との比較において、生成文法のどの理論を使うのか、X バー理論との対比の指摘、二人称の重視をめぐる理論評価、詞辞説が主述理論に代わりうるかの議論において生成文法とは異なる他の文法理論との比較可能性をめぐる議論、時枝による構造主義批判、および主観主義的言語観の成立に関して、ソシユール批判、現象学受容にとどまらない言語理論史的位置づけの可能性などについて、学説史的議論が詳細にわたって行われた。

また、理論言語学の観点から、時枝を言語思想史的に捉えるアロツ氏の研究の貢献として、時枝の詞辞論が認知言語学・生成文法の基礎という性格をもちうる可能性を浮かび上がらせた点、アロツ氏が「詞-辞」が「主-述」の「necessary complement」として位置づくことを発見した点が指摘され、現代文法のいう「IP 内主語」の問題をめぐる認知言語学や生成文法の知見に結びつく可能性、時枝文法がレキシコンとグラマーの分離という現代文法に通じる発想を示している点の発見などが研究成果であると指摘された。また、「陳述」問題における predication と assertion の概念の使い分けについて質疑が行われた。

さらに、1920年代-1930年代の社会理論、コミュニケーション理論の観点から、中井正一、三木清、戸坂潤などの同時代理論史への視座を収める可能性についての指摘も行われた。また、最後に、文法の歴史と思想の歴史との関係に関して、文法に思想を読む研究の妥当性の根拠をめぐって、本研究の根本的な性格付けについて、各章における解釈枠組みの相関と分析レベルを明示するような、構造的な見取り図を与えることが考えられるとの指摘があった。

アロツ氏からは、以上の諸点について、詳細な返答が論述の根拠を示して与えられ、著者の論点掌握が極めて成熟した水準にあることが確認された。

議論された諸問題は、アロツ氏の研究が、従来の研究の枠組みを超えていまだ未解明な問題に挑み、既存研究にはない新たな論点を浮かび上がらせた結果であり、審査委員は、氏の研究が、時枝の独特の言語理論の形成を解明した高い独創性をもつ言語学思想史の研究であることを確認した。

結論として、本審査委員会は、慎重審議のうえ、アロツ氏の論文「**Language as Process: Tokieda Motoki's Theory of Language at the Intersection of Linguistics and Philosophy**（言語過程 - 言語学と哲学の交点における時枝誠記の言語理論 -）」が、二〇世紀の知の転換期における非西欧言語文化圏における独自の言語理論の学的形成を、言語学、哲学、言語哲学、哲学史、言語理論史にまたがる総合的で学際的な方法により研究した、独創的で高い学術的価値を有する論文であり、博士（学際情報学）を授与するにふさわしい優れた学位請求論文として合格と認められることを全員一致で認定するにいたった。